

## [特別展によせて 2]

## 菊を持つ桃山時代の童子像について

桃山時代の肖像画の一つの特徴として、幼い子供が像主として取り上げられるようになったことが挙げられます。これは同時代に武将像や武将夫人像がさかんに制作されたことに伴う現象と考えられ、現存遺品のほとんど総てが、幼くして早逝した子供をともらうために描かれたものです。

たとえ原始時代であっても、古代であっても、子供に先立たれた親の悲しみに変わりはありません。しかし、肖像を作って亡き子を供養しようという態度は、やはり近世的なものでしょう。桃山時代の童子・童女像で、いま注目すべきことは、手に菊を持ったものが目下のところ二例あることです。この二例とも、秋季特別展『日本の肖像画』に陳列されます。

その一つは「宗夢童子像」(兵庫県姫路市慶雲寺)で、袴を着て坐し、右手に金扇、左手に紅菊一枝を持っています。像主について断定的なことは言えませんが、おそらく慶長初年ごろ(16世紀末)に姫路城の代官を勤めた豊臣氏の一族、木下延俊(1577~1642)の子吉六に相当するものと思われる。吉六は延俊と加賀(細川藤孝の次女)との間に生まれた長左衛門(寛政重修諸家譜所載)にあたると思われる、おそらく慶長初年より同5年に至る間に早逝し、死後まもなく肖像が描かれたと考えられます。

「宗夢童子像」の上部にある南化玄興(なんげげんこう、1538~1604、妙心寺の禅僧)の賛には「菴菊一枝露、明為薄命花」という一節がありますから、宗夢童子は菴(秋)に没したと思われ、菊花を手にするのも当たり前と言えるかもしれません。

もう一例は「前田菊姫像」(滋賀県大津市西教寺蔵)で、丹色の重

附(かさねつけ)を着た童女が右手に白菊一枝を持ち、犬張子、人形、独楽などの玩具を前にして座っています。菊姫は前田利家の第六女で、天正六年(1578)に側室笠間氏を母として京都で生まれ、名はきく、おきいさまと呼ばれました。近江大津の金物問屋西川孫右衛門重元の家で育てられ、やがて羽柴秀吉の養女になりましたが、天正十二年(1584)八月二十一日に七歳で早逝し、西教寺に葬られました。

前田菊姫の画像が白菊を手しているのは、名前にちなむものでしょうし、この童女は秋に没し、上部の真智上人の賛文にも「秋風吹ゆ花(秋風草花を吹き)」とありますから、菊を持つのも何等不思議ではないと言えるかもしれません。

少女が花を持つ画像の例として、室町時代の1446年に描かれた「長生比丘尼像」(京都市大徳寺蔵)があります。これは老比丘尼の肖像ですが、そのかわりに像主の曾孫である童女が紅梅の一枝を捧持して侍立しています。また、現存していませんが、京都建仁寺の禅僧天隠竜沢(1422~1500)の『天陰語録』に収録された「妙印童女」像賛に、「八歳で早逝した童女をいたんで、父母が悲しみ、その幼い姿を写させ、手に鬼灯花(ほおずき)を持たせ、前に犬張子を置いた」という意味のことが書かれています。こういう例を見ますと、童子や童女に花を持たせた像が描かれたのは、そのいたいけな姿に文字通り花をそえるためであったかもしれません。

しかし、私は菊花を手にした幼童像が二つ現存していることに、それでもなおこだわりを感じるので、それはいわゆる菊慈童との関係です。菊慈童というのは中国

の仙童で容姿が美しく、周の穆王(ぼくおう)に愛されましたが、十六歳の時罪を得て南陽郡鄧県(れきけん)に流されました。しかし、菊を愛し菊の露を飲んで不老不死となったと伝えられます。

菊慈童は古来好画題として多く描かれ、ふつう江戸時代前期の狩野探幽や常信の例が知られています。なお、京都国立博物館美術室長狩野博幸氏のご教示によると、桃山時代の屏風絵でこの画題を扱ったものがあるそうです。しかし、菊慈童の説話は、すでに南北朝時代の『太平記』卷十三に載っていますし、謡曲にもありますので(観世流以外では枕慈童)、桃山時代ごろでは広く知られていました。そこで、早逝した幼童の肖像の手に菊花を持たせて、今度生まれて

くるときは菊慈童にあやかって、長命を保ってくれという父母の願いが、あるいはこめられているのではないのでしょうか。

しかし前に申しましたように、菊を手にする現存の幼童像は僅か二例にすぎず、しかもその二例とも名前がちなんだり、あるいは没した季節が秋だったりして、菊を手にする別の理由がありました。そこで、菊慈童と関係付けるのは、今のところ私の単なる思いつきにすぎません。

しかし、菊を手にした幼童像が今後もう少し発見されると、私の想像も現実性を帯びてくるかもしれません。その種の肖像がもっと見つかることを期待しています。

(成瀬不二雄)

宗夢童子像(部分) 慶雲寺蔵



前田菊姫像(部分) 西教寺蔵

